

タイトル	M. M. ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典 (26)
著者	寺田, 吉孝; ТЭРАДА, Йоситака; 安田, 節彦; ЯСУДА, Сэцухико
引用	北海学園大学学園論集(178): 121-149
発行日	2019-03-25

M. M. ドブロトウヴォールスキーの アイヌ語・ロシア語辞典 (26)

(カザン, 1875 年)

M. M. ドブロトウヴォールスキー 著
寺 田 吉 孝 訳
安 田 節 彦 訳

訳者まえがき

今回は、下記の通り、補遺の残りの 5～13 を訳出している。

5. アイヌの医療
6. アイヌの食べ物
7. アイヌの衣服
8. 住まい
9. アイヌの生業
10. アイヌの風習と慣習
11. 四季と十二月
12. 名辞変化と動詞変化、語の置き換え、小詞とその用法
13. 目次

今回の訳出部分に出てくるアイヌ語の多くの語にも意味が書かれていないが、そのほとんどは、本辞典の本編の辞書に記載されている。訳文では、本編に掲載されている頁数、通し番号と語意等を注として書き入れた。

今回も、図が幾つか掲載されている。かなり不鮮明なものだが、書き換えずにそのまま文中に挿入した。

さらに、巻末にある「発行者より一言」も訳出した。これは、著者 M. M. ドブロトウヴォールスキーの兄の I. M. ドブロトウヴォールスキーが発行者として、また、編者として書きしるしたものである。

今回で訳出を終了した。訳出を開始したのが 1995 年だった。いくつかの理由により、途中 15 年近くの中断の期間をはさんでいるとはいえ、長くかかりすぎたというのが実感である。

訳出に際し、非常に多くの方々にご協力いただいた。この場を借りて、感謝申し上げたい。

26 回にも分けての『学園論集』掲載だったので、利用していただくには不便極まりないと思う。できる限り早く 1 冊にまとめたいと思っている。

(寺田吉孝 記)

5. アイヌの医療

1. チカフ-アラカ (Chikàkh-arakà, Чикàх-аракà)⁽¹⁾ には、ニナ-チカプ (Nina-chikap, Нина-чикапъ)⁽²⁾ やオケニカ (Oken'ka, Окéнька)⁽³⁾ やウリリ (Uriri, Урири)⁽⁴⁾ の綿毛が使われる。
2. 犬のこめかみをたたくと、犬は気絶し死んでしまう。そのような場合、アイヌは犬の尾をたたく。すると犬は生き返る。
3. カシトゥル (Kasituru, Каситуру) の末息子のチヴカランケ (Chivukarânke, Чивукарáнке) が胸の痛みを訴えた時、女まじない治療師が首や胸を嚙んで、ハナ (khanà, ханà)⁽⁵⁾ あるいは、ハナ-アラカ (khanà-araka, ханà-аракà)⁽⁶⁾ という病気を吸い取った。この病気では、血を出してしまわないと甚だ危険である。
4. アヴァトゥイケマ (Avatújkema, Аватúйкема) は、第2期の梅毒を患うシラロロ (Sirarorò, Сирарорò) 出身の女性である。顔や首には化膿した吹出物、胸にはみみず腫れ、腋の下と脇腹には巨大な腫れ物がある。さらに、部分的に潰瘍（扁平コンジローム）で覆われ、声を失っている。彼女の赤ん坊には、口の端に大きな亀裂があり、尻（一面に）に巨大な亀裂がある。彼女が病気のとき、この赤ん坊に乳をやった親類の女性には、胸に大きな腫瘍と潰瘍（扁平コンジローム）がある。
5. パラ-アラカ (Parà-arakà, Парà-аракà)⁽⁷⁾ (porò-arakà ではない) のはっきりとした症例は、スマオ・コタン (Sumao-kotan, Сумао-котанъ) 出身のマヴルカリ (Mavrukari, Маврукари) によって1867年に私に示された。この病気は、アイヌによると、昔から梅毒と関係がないと言いが、もちろん、これは間違った考えである。マウロカリ (Máurokari, Máурокари)⁽⁸⁾ は、ゴマオ (Gomaò, Гوماò) (本来の名前ではない) とも呼ばれていた。
6. コンジロームをこじらせたひどい壊血病のはっきりとした症例を私に示したのは、セトク・レロ (Setoku-rero, Сетоку-репо) の息子のカンジオマンテ (Kañjomante, Канджюмантэ) であった。彼は1869年の春にクスナイ (Kusunaj, Кусунай) の診療所にやってきた。病人はひ

(1) 本辞典 p.421, 9496 番目の語として掲載されている。「鳥の病気（人間の場合は、喉頭、咽頭や周辺の箇所
の病気）」の意。

(2) 本辞典 p.192, 4309 番目の語として掲載されている。「クマゲラ」の意。

(3) 本辞典 p.220, 4928 番目の語として掲載されている。「赤い色のキツツキ」の意。

(4) 本辞典 p.376, 8415 番目の語として掲載されている。「長い首を持つ黒い海の鴨」の意。「鶉」のことか。

(5) 本辞典 p.393, 8801 番目の語として掲載されている。「ガナ (ganà, ганà) を参照」と記載されている。ガナは、本辞典 p.52, 1011 番目の語として掲載されている。ロシア語のウスコブ (ускоп) 「内臓疾患」に似た独特の病気。

(6) 本辞典 p.393, 8802 番目の語として掲載されている。「ガナ (ganà, ганà) という病気」の意。

(7) 本辞典 p.245, 5488 番目の語として掲載されている。「ハンセン病」の意。

(8) 本辞典 p.165, 3692 番目の語として掲載されている。男性の名。マヴルカリ (Mavrukari, Маврукари) と同一人物であろう。マヴロカリ (Mavrokari, Маврокари) も同一人物であろう。

どく衰弱しているように見えた。彼は、寝ていた状態から起こされたので、座らされると気を失った。口の中には、一本の歯も見えなかった。歯茎にある巨大なポリープ状の腫瘍は、部分的に潰瘍だらけになって、すっかり歯を覆い、あらゆる固形の食物を食べるのを妨げていた。太腿や脛はすべて巨大な血あざで覆われていた。両腋の下には、ほぼ鶏卵大の扁平コンジロームがある。鼠けい部の関節には、潰瘍化したコンジロームのために、手のひら大の潰瘍がある。尻のあたりには、一面に巨大なコンジロームがあり、部分的に潰瘍化し、さらに、一週間の便秘を引き起こしていた。性器の付け根には、2つの化膿した潰瘍 (plaque muqueuses) がある。性器の両脇にも 50 コペイカ銀貨大の2つの化膿した潰瘍がある。また、性器の前部に3つ目の潰瘍があり、これは殆ど周り全体に及んでおり、部分的にみみず腫れで覆われている。それに加え、完全な包茎と S 字型の性器の湾曲があった。したがって、性器が勃起すると、尿が患者の腹の方に向けて上方に流れる。ウォッカ、鉄分、ラムソン、肉汁が功を奏して、患者は2ヶ月で全快した。コンジロームには硫酸銅 (cupri sulphurici) の溶液が塗られた。半年後、性器の湾曲がなくなった。

7. 私は、1870年にムラヴィヨフスキイ (Murav'yovskij, Муравьевский) 哨所からクスナイに来て、9月と10月にアイヌの疾病の統計を取った。その際、次のことが明らかになった。

ユルタを訪問して、また、その訪問の道すがらに診察した123名のアイヌの内、病人は40名(33%)、健康な者は83名であると判明した。病気の内訳は、疥癬 (tinea favosa) 18症例、つまり人口の14%、急性気管支炎9例(およそ人口の7%)、まぶたの炎症5例(およそ人口の5%)、肺炎1例、結核1例、膿瘍1例、内臓の腫瘍1例、目の打撲1例、麻痺1例、パラ-アラカ (Parà-arakà) 2例(その内の1例は足に潰瘍あり(梅毒)、もう1例は全身にいぼあり)。健康な者の中には、斜視1名、盲目の者1名、仮病を使う者1名(日本人の下で働かないようにするため)、また、疥癬が治った者が31名いたが、大小の禿が残った。疥癬を罹っている者の中に、女性が3名だけいた(そのうちの1名は子供)。疥癬が治った者の中には、女性が2名だけいた。このように、疥癬に罹っている者と治った者を合わせて考えると、49名となり、全人口の32%で、そのうちわずか4%が女性である。

8. オカンカ (Okánka, Окáнка)⁽⁹⁾ は、チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) によると、海の動物にも見られる。
9. ナカスイコ (Nakás'ko, Накáсько) という若いアイヌの女性(かつては、とてもかわいらしかったらしい)は、私が診察した時、数年間、足の潰瘍を患っていた。その潰瘍は両脛のほとんどすべてに及んでいた。彼女は自分が梅毒であることを否定しているが、それは間違いのようである。彼女は、シアンチ (Sianch, Сіанчъ)⁽¹⁰⁾ にあるヴァキロロ (Vakirorò, Вакирорò)⁽¹¹⁾

(9) 本辞典 p.220, 4928 番目の語として掲載されている。「サナダムシ」の意。

(10) おそらく地名であろう。

(11) 男の名。

のユルタで暮らしていた。しかし、後に「重病人」とみなされ、彼女のために特別の小さなユルタが作られた。私が彼女に最後に会ったのもそこだった。この風習は病人の精神状態に「致命的に」作用するらしい。彼女は、かつては明るくて「エロティックな話」をするのも好きだったのだが、いまでは、病気がとくに悪化しているわけでもなかったのに、死の準備をしているようだった。

10. ナイブチ (Hájbuchi, Найбучи) のケランゲ (Kerangè, Керангè)⁽¹²⁾ のユルタで、全身に疣ができた年配のウソンケ (Usónke, Усónке) という女性に会った。彼女は、その疣が痒かったので、治りかけの潰瘍のようになるほど掻いた。この疣ないし瘡は、2年前(私の初めての訪問のとき)におそらく何の原因もなく始まった。彼女は、性器が痛むことが一度もなかったのも、梅毒であることを否定した。
11. オクイーエスィカレアラカ (Okùj-es'kare-arakà, Окүй-эськарé-аракà) 「尿閉」のとき、アイヌは鯨の髭から棒をつくり、それを導尿管の代わりに差し込む。尿は初めは雫となって流れ、そのあと病人は排尿できるようになる。チヴォカンケはこの道具を父親のために作った。女性は尿閉の発作のときこれを差し込む。
12. ススニ (susuni, суснй)⁽¹³⁾ の汁が生傷に塗られるのは、春である。治癒が早まるようである。ススニ-コ (susuni-ko, сусуни-ко) 「ヤナギの粉末」は、冬、傷や潰瘍につけられる。
13. 疥癬に罹っている者の衣服を着用するため譲るのは罪である。
14. イケマ (Ikéma, Икéма)⁽¹⁴⁾ は、ウラ (urà, урà) 「打撲」の良い薬である。
15. 疥癬は、アイヌの言うところによると、シラミから生ずる。
16. オタキナ (Otà-kinà, Отà-кинà)⁽¹⁵⁾ は、アイヌによって温湿布用に使われる。
17. ラモコヴペ (Ramokónpe, Рамоко́впе)⁽¹⁶⁾ は、胸の病の薬になる(軟膏にして使われる)。
18. 私はサハリンで100歳くらいと思われる以下の高齢の方々に会った。

①ポロナイ (Poronaj, Поронай) の老人, カントゥスイトゥイエ (Kantus'tujyè, Кантусьтуйё) は、セトクレロ (Setokuréro, Сетокурéро) と同年齢である。彼はつねに煙管用の木の箱を枕にして仰向けに横たわっていた。

②ナヨロ (Hajoro, Найоро) の老人, セトクレロは、私が訪問した時すでに毫碌していた。

③ヒ・イヒ (Khi-ikhi, Хи-ихи) は、チュプオフナイ (Chupuokhnaj, Чупуохнай) のシャーマンである。彼も煙管用の箱を枕にして絶えず横たわっていた。カントゥスイトゥイエと同様に盲目だった。

(12) 男の名。

(13) 本辞典 p.311, 6993 番目の語として掲載されている。「ヤナギ」の意。

(14) 本辞典 p.78, 1654 番目の語として掲載されている。「(山地に生える或る植物の) 薬根」の意。

(15) 本辞典 p.233, 5239 番目の語として掲載されている。「エンドウに似た草本」の意。

(16) 本辞典 p.267, 5998 番目の語として掲載されている。「魚の膀胱(脾臓?)」の意。

- ④シララカ (Siraraka, Сирарака) の太った老人, ムソフテ (Músokhte, Мýсохтэ) は, 目の炎症を患っていた。
- ⑤トブチ (Tobuchi, Тобучи) の老人, ヤマスク (Yamásuku, Ямáсуку) は, 聾者だった (完全な聾者ではなかった)。
19. ノテレ (Notére, Нотéре) は, トウナイチャ (Tunajcha, Тунайча) 出身の老人で, トブチのヤマスクの孫であるらしい。
20. アイヌは, 梅毒を日本の病気と呼ぶ。私は, シラロ (Siraro, Сираро) 出身の日本人チェイニイモン (Tchéjn'imon, Тчéйнъимонъ) とゴンハンジ (Gonkhanzi, Гонханзи) の助手ホランゼロ (Khoranzero, Хоранзеро) の2名の梅毒を観察し, 治療する機会を得た。
21. アサマトウンク (Asamatúnku, Асаматýнку) は, チラオフナイ (Chiraokhnaj, Чираохнай) 出身のアイヌで, 腋の下と肛門 (anum) に巨大なコンジロームがあった。すぐに全快した。
22. ノトム・アイヌ (Nótom-áynu, Нóтомъ-áйнý) ⁽¹⁷⁾ は, 病人のシララ (Sirara, Сýраpa) ⁽¹⁸⁾ からキニーネとモルヒネの一部を病気の時のための保存用に受け取った〈ガフカ・トマリ (Gákhka-tomári, Гáхка-томáри) ⁽¹⁹⁾ において〉。ノトム・アイヌの説明によると, これはアイヌ-プリ (áynu-púri, áйнý-пýри) ⁽²⁰⁾, つまりアイヌの慣習である〈おそらく, 治療が上手くいかなかったり, 有害だった場合に, シャーマンからアシムペ (asímpe, асýмпе) ⁽²¹⁾ を得るために〉。
23. ケサントマ (Kesantamá, Кесантамá) ⁽²²⁾ は, ナイエロ (Náiyero, Нáйepo) で浮腫を患っていた。成人した孫がいた。彼女は, おそらく 100 歳くらいだった。彼女が死んだとき, 私は彼女ののことを尋ねた。すると, 死者の魂がそのことで腹を立てるので, 死者について語るのは, 罪であり危険だという返事を得た。このような考えは, 「猫は誰の肉を食べたか知っている (Знает кошка, чьё мясо съела) ⁽²³⁾」というロシアの俚言を思い出せば, 食人の結果ではあるまいかと思う。
24. イコノフカマ (Ikonokhamá, Иконохкамá) ⁽²⁴⁾ はポロナイ (Poronaj, Поронай) に住む。脊椎カリエスのため背中に潰瘍があり, 足は麻痺している。梅毒は否定している。
25. イケマ (Ikema, Икема) ⁽²⁵⁾ は, マウカ (Mauka, Маука), クスンコタン (Kusunkotan,

(17) 本辞典 p.203, 4572 番目の語として掲載されている。男性の名。

(18) 本辞典 p.297, 6666 番目の語として掲載されている。男性の名。

(19) 本辞典 p.54, 1066 番目の語として掲載されている。ロシアのカルサコフ哨所の場所にあるアイヌと日本人の混住の村。

(20) 本辞典 p.7, 85 番目の語として掲載されている。「人に対する態度, 慣習」の意。

(21) 本辞典 p.25, 430 番目の語として掲載されている。「償い」の意。

(22) 本辞典 p.130, 2886 番目の語として掲載されている。女性の名。

(23) 「己の罪を百も承知である」という意味。

(24) 本辞典 p.80, 1715 番目の語として掲載されている。女性の名。

(25) 本辞典 p.78, 1654 番目の語として掲載されている。「(山地に生える或る植物の) 薬根」の意。

- Кусункотанъ)に生える。それは、オネナイ (Onenaj, Оненай)⁽²⁶⁾ 沿いやクスナイ (Kusunaj, Кусунай) 辺りにもあると言われている。
26. イキサフチェブ (Ikisakhchëb, Икисахчëбъ) は、下顎の長い、浸透性のある、円錐状の魚である。スープにして、刺すような胸の痛み用の薬にする。
27. イルレ (Irúre, Ирýре)⁽²⁷⁾ あるいはエルフ (Eruf, Эрүфъ)⁽²⁸⁾ は、ピンニ-キナ (Pinni-kinà, Пинни-кинà)⁽²⁹⁾ に似ている (Rumex confertus (конский щавель) に類似している)。これは、下痢の薬とされ、食用にもなる。
28. イチャラプ (Icharápu, Ичарáпу) は、ノコギリソウのように葉っぱがたくさん分かれた草である。その幹は、少しいやな臭いと味がするボルチョフカ (borchovka, борчовка)⁽³⁰⁾ に似ている。それをアイヌや日本人は生のままや乾燥させて食べる。アイヌはそれを壊血病の薬として食べる。ストゥレルカ (Stryelka, Стрýлка) では、子供たちがそれを好む。
29. ピンニ-キナ (Pinni-kinà) と思われるものの汁をムソフテ (Musokhte, Мусохтэ) は眼瞼炎 (blepharitis) および結膜炎 (conjunctivitis) の薬として目に塗っていた。
30. イトウの胆嚢は胸の病気のときに胸に塗られる。⇒ 17. (Ramokónpe, Рамоко́впе)
31. ヌフチャ (Núkhcha, Нýхча) は、香りの良い草である。葉の片側はビロードのようであり、朽木色をしている。これは湿った場所に生える。アイヌは、それからゆで汁を作り、咳の薬として飲む。
32. サハリンの蛇に咬まれても大丈夫であり、オヤヴ-キナ (Oyàv-kinà)⁽³¹⁾ も必要ない。アイヌが咬まれることはまれだが、犬はよく咬まれる。
33. パラキナ (Parákinà, Пара́кина)⁽³²⁾ は、湿原性の場所に育つ草である。あでやかな白い花をつける。その花には、指の長さくらいの円錐形の黄色い花床がある。ニンシがいないうち、熊はほとんどこれだけを常食とする。これは傷薬となる。ひょう疽 (panaritium) のとき、これは指にもはられる。
34. 水に浸けて柔らかくなったスルク (súruku, сырку) 「トリカブト」の根をアイヌは矢に塗る。スルクに非常に毒性があると考えているからだ。頭痛に対しては、この根を身体にすり込む(痛みをそらすと同時に麻酔剤ともなるのか?)⁽³³⁾。

(26) オンネナイ (Onnenaj, Онненай) のことであろう。本辞典 p.226, 5075 番目の語として掲載されている。トコンボ (Tokombo, Токомбо) の南方にある川の名。

(27) 本辞典 p.95, 2048 番目の語として掲載されている。「薬草」の意。

(28) 本辞典 p.78, 1654 番目の語として掲載されている。「食用の草」の意。

(29) 本辞典 p.252, 5640 番目の語として掲載されているピンネ-キナ (Pinne-kinà, Пинне-кинà) と同じ語であろう。

(30) どのような植物か不明。

(31) 本辞典 p.241, 5410 番目の語として掲載されている。「蛇にかまれたときのための薬草」の意。

(32) 本辞典 p.245, 5494 番目の語として掲載されている。「熊草 (медвѣжья трава)」の意。

(33) 疑問符は原文のまま。

35. タラマニ (Tarámani, Тарáмани)⁽³⁴⁾ は温湿布に入れて, 咳の時に胸に貼る。
36. フラ-ヴェン-キナ (Khura-ven-kinà, Хура-венъ-кинà) あるいはフラ-ヴェン-チポク (Khura-ven-chipoku, Хура-венъ-чипоку)⁽³⁵⁾ という悪臭のする根をアイヌは咳薬として用いる。
37. チェトイ (Chetòj, Четòй)⁽³⁶⁾ は火傷に当てられ, 吐剤としても効く。
38. チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) は, トイ-ウクルベ (toj-ukurúpe, той- укурúпе)⁽³⁷⁾ をアイヌが眼病の薬として食べるということを否定している (味が良いと言っている人もいる)。
39. ヴェン-カムイ-キサラー-プイ (Ven-kamùj-kísara-puj, Венъ-камùй-кíсара-пуй)⁽³⁸⁾ は, ヤドカリの棲家であり, あらゆる耳の病気に用いられる。これを水に浸して浸剤を作り, その浸剤を耳に塗る。あるいは, ヴェン-カムイ-キサラー-プイを焼いて, 水に溶かした灰を耳に塗る。
40. ある植物の根であるオタクル (Otákuru, Ота́куру)⁽³⁹⁾ とピリカラ-キナ (Pirikara-kinà, Пíрикара-кина)⁽⁴⁰⁾ は傷に当てられる。
41. ヘタリー-アラカ (Khetári-arakà, Хетáри-аракá) は, 呼吸の際に起こる刺すような痛みである。アユストンコ (Ayustonko, Аюстонко)⁽⁴¹⁾ という名の小魚のスープがこの病気の薬である。
42. コンケマフ (Kónkemakh, Кóнкемахъ)⁽⁴²⁾ は, かつてポロペトゥンコタン (Poropetunkotan, Поропетункотанъ) に住んでいた狂人である。
43. オゾン反応についての私の観察

1867 年 12 月の平均反応 = $2\frac{1}{2}$ ⁽⁴³⁾

1868 年 1 月の平均反応 = $4\frac{1}{3}$

1868 年 2 月の平均反応 = 5 %

私が絶えず注目していることは, サハリンにおいては高いオゾン反応 (例えば, 8 か 9) の際に, 「常に」腸の病気 (下痢) が, 「時おり」気管支カタルが発見されていたということである。

(34) 本辞典 p.320, 7168 番目の語として掲載されている。「針葉の原始的な木 (木の内部は赤い)」の意。

(35) 本辞典 p.406, 9114 番目の語として掲載されている。「薬草」の意。

(36) 本辞典 p.419, 9448 番目の語として掲載されている。「カオリン (陶器の材料になる白土)」の意。

(37) 本辞典 p.327, 7363 番目の語として掲載されている。「ミミズ」の意。

(38) 本辞典 p.49, 944 番目の語として掲載されている。「ヤドカリの住居となる柔らかい, 耳に似た貝殻 (耳の病気の薬)」の意。

(39) 本辞典 p.234, 5241 番目の語として掲載されている。「或る植物の根 (傷薬)」の意。

(40) 本辞典 p.253, 5666 番目の語として掲載されている。「バイケイソウ属の植物と同じような葉を持つ草 (傷口にはられる)」の意。

(41) 本辞典 p.36, 683 番目の語として掲載されている。「1 ヴェルショーク (長さの単位; 1 ヴェルショーク = 4.445 cm) くらいの長さの川や湖にいる魚」の意。

(42) 本辞典 p.143, 3198 番目の語として掲載されている。男性の名。

(43) 数値が何を意味しているのか不明。

6. アイヌの食べ物

1. 1871年の6月、クスナイ (Kuysunaj, Кусунай) で、キタ (kità, кита)⁽⁴⁴⁾「鮭, オホーツク海のサーモン」が数匹獲れた。普通、この魚はクスナイでは見られない。
2. オキリケ (Okirike, Окирике)⁽⁴⁵⁾をたくさん食べると、尻から脂が漏れる (アイヌの警句)。
3. モコマイ (Mokomaj, Мокомай)⁽⁴⁶⁾を獲るために、アイヌはかかとを使って海の底を掘る。貝にたどり着くまで、かかとを上下左右に動かす。ススイ (Susuj, Сусуй) では、春、この貝がたくさん食べられる。
4. アイヌの良い酒は、アイヌの酒盃三杯で酔うのに十分である。
5. サフカ (Sákhka, Сáhка)「箸」には、木製のもの、獣骨製のもの (牙製のもの)、色を塗ったもの、塗らないものがある。
6. カルシ (karùs', карýсь)「キノコ」の中で、アイヌが食べるのは、ナメハツタケ (ベニタケ科) である。
7. ヨーロッパノイバラの実は、アイヌ語でオタル (otáru, отápy)⁽⁴⁷⁾と呼ばれる。冬に備えて、炉の上で干され、擦りつぶしたものをイクラといっしょに食べる。
8. チボク (Chíroku, Чíпоку)⁽⁴⁸⁾は乾燥したものを食べる。
9. チョグエク (Chóguyeku, Чóгыеку)「ネズミイルカ」は、エタスペ・コイキ (etáspe kóiki, этáспе кóйки)「トドを獲る」⁽⁴⁹⁾、フンペ・コイキ-アイキステ (khúmpe kóiki-ájkiste, хýмпе кóйки-áйкисте)「クジラを獲る」⁽⁵⁰⁾。アイヌはこれを「アイヌ・ウネイヌ (ajnu-unejnu, айну-унейну)」つまり、「人間に似たもの」と呼ぶ。というのは、それによって殺されたサケやトドが人の食べ物となるからである。
10. イベキクア (ipekikuà, ипекикуà)⁽⁵¹⁾は、このような形をしている。



(44) キタ (kità, кита) は、本辞典 p.138, 3076 番目の語として掲載されている。そこでは「根, (イノシシ, 象などの) 牙」の意であると書かれている。

(45) 本辞典 p.221, 4960 番目の語として掲載されている。「短い髭のある乳首がないクジラ, 公海で暮らす, ニシンを食べない」と書かれている。

(46) 本辞典 p.173, 3867 番目の語として掲載されている。「食用の貝」の意。

(47) 本辞典 p.234, 5249 番目の語として掲載されている。オタルフ (Otaruf, Отápyфъ) ともいうと記載されている。

(48) 本辞典 p.423, 9543 番目の語として掲載されている。「フレキナ (khurenikà, хурекина) の同意語, 食用の草」と記載されている。

(49) エタスペ (etáspe, этáспе) は、本辞典 p.466, 10496 番目の語として掲載されている。「トド, アシカ」の意。コイキ (kóiki, кóйки) は、本辞典 p.140, 3135 番目の語として掲載されている。「(魚を) 獲る, (クロテンを) 狩猟する」の意。

(50) フンペ (khúmpe, хýмпе) は、本辞典 p.405, 9105 番目の語として掲載されている。「クジラ」の意。コイキ-アイキステ (kóiki-ájkiste, кóйки-áйкисте) のコイキ (kóiki, кóйки) は、注の 36 にあるように、「獲る, 狩猟する」の意味であろう。アイキステ (-ájkiste, -áйкисте) の意味は不明。

11. イツヤノイ (itsyánoj, ицъяной)「早期に訪れるカラフトマス」は、大きな頭と大きな歯を持ち、身体には傷と赤い筋に覆われて、川の上流から戻ってくる。
12. キセリ-アマニ (オamani) < kiseri-amani (omani, кiserи-амани (омань)>は旅用の煙管の入れ物であり、二つの開閉する部分からなり立っている。その一方には、煙管用の溝、もう一方には箸用の溝<サフカー-オ (sakhka-o, сахка-о)⁽⁵²⁾>がある。たたまれたものは革紐の輪で括られる。たたむと、次のような形をしている。
13. 乾燥させたハラ (kharà, харà)⁽⁵³⁾は冬にスープに入れて食べる。
14. キト (kitò, китò)⁽⁵⁴⁾は乾燥させたものも、生のものも、焼いたものも、煮たものも、アイヌが好む食べ物である。同時に壊血病の薬でもある。
15. アユスキナ (Ayúskina, Аюскина)⁽⁵⁵⁾は火の上で焼かれる。
16. トマ (Tomà, Томà)⁽⁵⁶⁾は、トマラ (tomarà, томарà)⁽⁵⁷⁾という植物の球根である。オヒョウの卵と合わせて食べる料理はアイヌに好まれている。Tomàの球根はクルミ大の大きさで、茹でて食する (非常に美味)。
17. ケロ (Kerò, Керò)⁽⁵⁸⁾すなわちアラッペ (arappe, араппе)⁽⁵⁹⁾をアイヌは生で食べる。
18. ニパロ (Nipálo, Нипáло)「大皿」は (液体ではない) 食べ物を出すときに役立つ。
19. ハラ (kharà, харà)⁽⁶⁰⁾は、ハナウド属の植物であり、シトゥルキナ (siturúkina, ситурúкина) と呼ばれるオフカユ (okhkayu, охкаю)「草の芯」である。それをアイヌと日本人は冬用に乾燥させて、魚といっしょに食べる。
20. フンペ-ケマ (Khúmpe-kemà, Хүмпе-кемà)は鯨の尾びれである。乾燥させて、二つずつくられる。スープに入れて煮ると、とても美味だとのことである。
21. アラコイ (arakòj, арако́й)「キュウリウオ」(корюшка?)⁽⁶¹⁾は5月と11月に大量に群れをなす。アイヌはたも網でそれを獲る。」
22. 鯨はアイヌによって主に9月 (ikhári-chuf, ихáри-чуфъ)に捕獲される。

(51) 本辞典 p.91, 1958 番目の語として掲載されている。「土から食用の根を掘り出すための棒」の意。

(52) 本辞典 p.285, 6386 番目の語として掲載されている。「箸箱」の意。

(53) 本辞典 p.304, 8836 番目の語として掲載されている。「シトゥル-キナという名の草の軸」の意。

(54) 本辞典 p.138, 3080 番目の語として掲載されている。「ラムソン」の意。

(55) 本辞典 p.36, 683 番目の語として掲載されている。「ある食用の草」の意。

(56) 本辞典 p.329, 7397 番目の語として掲載されている。「トマラという食用の草の球根」の意。

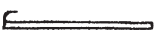
(57) 本辞典 p.329, 7398 番目の語として掲載されている。「花そのものがイトベントウラという名前が付いた球根を持つ春の花」の意。

(58) 本辞典 p.130, 2884 番目の語として掲載されている。「アラッペを参照」の指示がある。

(59) 本辞典 p.304, 8836 番目の語として掲載されている。「食用の2枚貝」の意。「ケロは同意語である」の説明がある。

(60) 本辞典 p.394, 8835 番目の語として掲載されている。「シトゥル-キナという名の草の芯」の意。

(61) 疑問符は原文のまま。意味は不明。

23. マレ (máre, mápe)⁽⁶²⁾ は、鯨やカラフトマスを川の上流で捕獲する道具である。次のような形をしている。  この道具で魚は簡単に「引っ掛けられる」。

7. アイヌの衣服

1. ウコルフマ (Ukorúkhma, Укорúхма)⁽⁶³⁾ が持っているナイフの鞘 (ナイフ・ケース) に、煙管の雁首二つ、吸い口、真鍮製の満州の硬貨が二つあるのを見たことがある。
2. 男は右の太腿に2本のナイフを身につけている。チェイキ・マキリ (chéiki makíri, чéики маки́ри)⁽⁶⁴⁾、サ-マキリ (sa-makíri, са-маки́ри)⁽⁶⁵⁾ およびオフキタ (ókhkita, óхкита)⁽⁶⁶⁾ を身につけている。
3. プリモロ (pírmoro, прíморо)⁽⁶⁷⁾ には、時折、アイヌが作った鹿の角製の装飾が見られる。
4. モイシマ (mójsima, мо́йсима) は、アイヌのリストバンドであり、模様がついている。冬、とくに犬ぞりに乗るときに男性が身につける (寒さよけ)。
5. エキシボ (ekis'po, экисьпо) は、男の子の剃った額にある髪の毛の房である。その房には、ホフツイリ (khókhtsiri, хóхцири) 「ビーズを縫い取りした三角のもの」が結ばれている。
6. オンカ (onka, онка) とは、ポロフ (Poròkh, Порòх) 「アザラシ」の皮を加工することである (長靴用に)。毛はナイフで剥ぎ取られ、皮は納屋に吊るされる。そして、そこで雨にあたって、白くなり、長靴作りに適したものとなる。
7. モンペ-トゥン-カニ (mómpe-tun-káni, момпе-тунъ-кáни)⁽⁶⁸⁾。チャプイヌ (Chapújnu, Чапу́йну)⁽⁶⁹⁾ に懸けられた曲がりくねった指貫もかつてこの名で呼ばれた。
8. アイヌのオポンペ (orópme, опóмпе)⁽⁷⁰⁾ は、太腿の中ほどまでしか達しない。
9. アサマトウンク (Asamatúнку, Асаматúнку)⁽⁷¹⁾ (私は、彼の腋の下のこぶし大のコンジロームを治したことがある) のところで、爪のついたアザラシの足でできた刻み煙草入れ (紐で締

(62) 本辞典 p.162, 3626 番目の語として掲載されている。マリ (mari, мари) とも言う。

(63) 本辞典 p.367, 8211 番目の語として掲載されている。男性の名。

(64) 本辞典 p.419, 9438 番目の語として掲載されている。「イナウを作成するためのナイフ」の意。

(65) 本辞典 p.281, 6292 番目の語として掲載されている。「アイヌの2番目のナイフ」の意。イナサク (iná-saku, ина́саку) とポロマキリ (poromakíri, поромаки́ри) 参照という指示。

(66) 本辞典 p.238, 5329 番目の語として掲載されている。「(結び目をほどくための) 鹿の角」の意。

(67) 衣服の名であると推測されるが、詳しくは不明。

(68) 本辞典 p.173, 3886 番目の語として掲載されている。「指輪、宝石付きの指輪」の意。

(69) 本辞典 p.416, 9372 番目の語として掲載されている。チャプイノ (chabújno, чабу́йно) 参照という指示。「プレスレット」の意。

(70) 本辞典 p.228, 5121 番目の語として掲載されている。「ズボン、アイヌの膝あて」の意。

(71) 本辞典 p.24, 417 番目の語として掲載されている。男性の名前。

- める小袋)を見かけたことがある。
10. チヴォカシケ (Chivokanke, Чивоканке) は、オコレ-エピリケ (okore-epirike, окоре-эпи́рике) 「女性の二本目のナイフ」を否定し、アイヌの女性が持っているナイフは、エピリケ (epirike, э́пи́рике)⁽⁷²⁾ 一本だけだと言う。
11. イラクサの粗糸作り；
- 1) ハイカラ (Khaj-karà, Хай-кара) 「イラクサから皮を剥ぐ」
 - 2) ハイキレ (Khaj-kirè, Хай-кирэ) 「ナイフでその表皮を削り取る」
 - 3) ハユフカラ (Khayuf-karà, Хаюфъ-кара) 「その表皮を水に浸ける」；9月まるひと月浸ける。
 - 4) 10月, 竿に架けて干す
12. アイヌの長靴は暖かいところに置いてはいけぬ。さもないと, オンナイキタ・チ・アン, モナシナ・チヴェンテ (onnájkita chi an, monás'na chivénte, онна́йкита чи анъ, мона́сьна чиве́нтэ), つまり, 中がすっかり腐って, すぐに破れてしまう。
13. チンパイ (chímpaj, чимпай) 「シャツ」は, 裏地のない, 膝まである, 首のところにひもが付いている上衣である。
14. エカイイエ (ekajyè, экайё) は, アイヌの上衣の袖や打合せや裾の周りにある模様の入った縁取りである。
15. エトゥーコロ・キロ (Etu-koro kirò, Эту-коро кирò) は, 長くて細いつま先が上に曲げられた長靴である。家庭用や, 盲目の老人用である。盲目の老人は家から遠くへ行かない, 従って躓くこともない。
16. 子供は犬ぞりに乗るとき, 鈴の代わりに, コンコ (kónko, кóнко)⁽⁷³⁾ をよく帯に付ける。
17. キセリ-チヴ-カニ (kiseri-chiv-kani, Кисери-чивъ-кани) は, カフコモ (kákukomo, кáхком o)⁽⁷⁴⁾ とともにアイヌが各自身につけている。これは先が曲がった金属 (鉄または銅) 製の尖った棒である。ときに一方の先がキサラ-ポイイエ-カニ (kísara-pojuè-káni, ќисара-пойе-кáни) 「耳かき」になっている。
18. クフケ (kúfke, кúфке)⁽⁷⁵⁾ には 70 個ほどの留め金やリングがついている。それらをアイヌはギリヤークから手に入れる。

(72) 本辞典 p.463, 10424 番目の語として掲載されている。「女性のナイフ (おしりの近くの腰に付ける)」の意。

(73) 本辞典 p.143, 3202 番目の語として掲載されている。「犬用の銅製のガラガラ (動くとき音の出る飾り)」の意。

(74) 本辞典 p.124, 2742 番目の語として掲載されている。「刻み煙草入れ, 藁で編んだ袋」の意。

(75) 本辞典 p.157, 3512 番目の語として掲載されている。「留め金やリングが付いた革製の帯」の意。

19. ミロ (mirò, мирò) 「火口, 火打石, 火打ち金を入れる皮の袋」は, ポロフ (poròkh, порòх)⁽⁷⁶⁾ やトゥカラ (túkara, т́укара)⁽⁷⁷⁾ の皮で作られている。2つの部分から構成されていて, 一方がもう一方に収まるようになっている。
20. ホシギ (khósigi, хóсиги) は, アイヌの長靴の胴である。胴がアザラシの皮でできているのに対して, つま先部分はイトウの皮でできている。
21. チェイキ・マキリ (cheiki makiri, чейки ма́кири)⁽⁷⁸⁾ は, アイヌが絶えず帯に付けているものである。
22. ガンパキ (Gámpaki, Га́мпаки) 「脛当て」は, 草や枝が脛を傷つけないように遠出のときに使われる。
23. オフキタ (okhkita, охкита) 「結び目を解くための角」は, アイヌが絶えず身に付けているものである。
24. アイヌのアルトウシ (artus', артусь) 「上衣」には4つの種類がある。
- 1) カランニ-アルトウシ (karanni-artus', каранни-артусь) は, カランニ (karánni, карáнни)⁽⁷⁹⁾ の鞣皮から作られている。
 - 2) オビヴニ-アルトウシ (opivni-artus', опивни-артусь) はオビヴニ (opívni, оп́ивни)⁽⁸⁰⁾ の木の鞣皮から作られている。
 - 3) カチコ-カラ・アルトウシ (káchko-kara artus', ка́чко-кара артусь) は, イラクサで作った縦糸とオビヴニ (opívni, оп́ивни) で作った横糸で織った斑模様の上衣。
 - 4) テタラペ (tetarápe, тетара́пе)⁽⁸¹⁾。
25. モセ-カブ (móse-kabu, мо́се-кабу)⁽⁸²⁾ から, アイヌの女性は, 筵や斑模様の上衣を織るための縦糸, 刺繍用の糸や白い上衣全体を作る。ハイカ (khaj-ka, хай-ка) 「イラクサの糸」は, 亜麻糸や絹糸に取って代わられつつある。イラクサの表皮が剥がされるのは, まだ生えているとき, その場においてである。
26. ニリ (niri, нири) 「二重のボタン」は, アイヌ女性自身が我々の⁽⁸³⁾ 錫のボタンから作る。
27. トドの牙からアイヌはボタンを作る。
28. オフケヴゲ (okhkevge, охкевге) 「襟の飾り布」は, 次のような形をしている。
黒い組みひもで縁取りされた飾り布の形は次のような形である。

(76) 本辞典 p.263, 5885 番目の語として掲載されている。「特別の種類のアザラシ」の意。

(77) 本辞典 p.347, 7784 番目の語として掲載されている。「1歳を過ぎたワモンアザラシ, パクイ (pákuji, па́куй) の種」の意。

(78) 本辞典 p.419, 9438 番目の語として掲載されている。「イナウをつくるためのナイフ」の意。

(79) 本辞典 p.120, 2648 番目の語として掲載されている。木の名。

(80) 本辞典 p.227, 5110 番目の語として掲載されている。木の名。

(81) 本辞典 p.358, 8031 番目の語として掲載されている。「Laper, 粗末な生地で作られたシャツの一種」の意。

(82) 本辞典 p.175, 3938 番目の語として掲載されている。「イラクサの表皮」の意。

(83) 「ロシア人が作った」の意であろう。

8. 住まい

1. アイヌのポケ (pokè, покè)「桁組」は, 屋根(樹皮で作られている, 稀に板と藁で作られていることもある)を支える細い丸太であるが, 互いを支え合っていない。互いを支え合っている桁組は○○⁽⁸⁴⁾と呼ばれている。
2. ウトゥルマ (uturuma, утурума)。ユルタ内において, 壁が内側に倒れないよう支えている2本の筋交い(壁は内側に傾いて作られている)。それらは, 壁が外側に倒れないように支えている我々の梁に当たる(調べる⁽⁸⁵⁾)。
3. ヴァ (va, ва)「釜の下に敷く草で作った円形のもの」は, トルブチの (толбучинский)⁽⁸⁶⁾ アイヌのところにはない
4. イク-スマ (ikù-sumà, икү-сумà)「くり抜かれた灰色の石で作られたアイヌの灰皿」が使われるのは極めてまれであり, 少数の者しか持っていない。ふつう煙管の灰は炉の中へ落とされる。

9. アイヌの生業

1. 熊が怒ると, 猟師には熊が見えなくなる。そのため, そりの先頭につけるもっとも良い犬を生贄としなければならない。そうすると, 熊が見えるようになり, 殺すことができる。
2. エッチャロ (echcharo, эччаро)「クロテンを獲る冬の罝」には, ニシンが置かれる。カマ (Kāma, кáма)「クロテンを獲る春の罝」には, 馬の毛を置く。
3. オムバフカ (ombakhka, омбахка)とペコス (pékos, пéкос)は, サハリンでクロテン猟をして生計を立てていたギルヤーク人である。アヴグスチノヴィチ⁽⁸⁷⁾ (Avgustinovich, Августиновичъ)にツァーリのもとへ行くように勧められた。
「ツァーリを見ろ, 死ねじゃないか? 他のもの見ろ, お金くれか? ツァーリ見ろ, お金をいっぱいくれか? 金の服(ドレス)くれか? 大きなナイフ(刀)くれか? 大きなノイオン (Нойонъ)⁽⁸⁸⁾ つくれか? 家に帰る, お金使い果たせ, もっとくれ, そうじゃないか? 満

(84) 編者注; 著者はその名前を挙げていない。

(85) 何を調べるのか不明。

(86) 「トブチの (тобучинский)」とすべきところか。

(87) どのような人物かは不明。おそらくロシア人であろう。

(88) 「(革命前の) モンゴルの封建領主」の意。

州人ツァーリ呼べ、女くれ；ロシア人見ろ、女をくれ、そうじゃないか？」⁽⁸⁹⁾

ギリヤーク人の生業に対するアイヌの妬みと彼らとアイヌとの争いがある〈トゥライツィスィカ(Trajtsis'ka, Трайциська)⁽⁹⁰⁾ではアザランが原因で、カシトゥル(Kasituru, Каситуру)⁽⁹¹⁾のところでは子熊が原因で〉。

4. チカイ(Chikaj, Чикай)⁽⁹²⁾ 岬の近くで、1871年5月26日、私は一日に10頭の熊を見かけた(その内の一頭は、私たちが殺した)。サンバクスーアイヌ(Sámbakus-ájnu, Сámбакусъ-áйнu)⁽⁹³⁾は、槍と弓をもって二人で舟に乗って熊獵に出かけた(しかし、一頭も仕留められなかった)。カシトゥルはこの年3頭の熊を殺した(その内の1頭は威嚇の矢に自ら当たった)。
5. カシトゥルは1872年4月にギリヤーク人と息子のトイラフク(Tójrakhku, Тóйрахку)⁽⁹⁴⁾とともに、ボートに乗って、熊用の槍で2頭のトドを襲った。一頭は仕留めて引き上げることができたが、もう一頭は逃げた。私がいた頃の未曾有の壮挙であった。というのは、アイヌは岸に這い上がったトドしか仕留めないからである(長い槍で)。
6. ゲユプセタ(Geyúpu-seta, геýпу-сета)「曳き綱をよく引く(怠けない)犬」は、クロテン2~5匹の価値がある。模範的な先導の犬に対して、アイヌは刀(ふつうクロテン10~20頭の値)も与え、さらにクロテン2, 3頭をおまけに付けさえる。
7. 私は、アイヌにおける「運、不運」の概念を明らかにすることができなかった。すべてが知識や力や巧みに基づいており、偶然性には基づかない。このため、恐らく、われわれの「不運な」という言葉は、「オフチネ(ókhchine, óхчине)⁽⁹⁵⁾」という語で、「幸運な」は「オチナカリネ(ochínakarine, очíнакарине)⁽⁹⁶⁾」という語で伝えることができるだろう。しかし、アイヌには、祈るのが巧みな者はすべてがうまくいくが、祈ることが巧みでない者や祈る能力がない者は何もうまくいかない、という考えもある。
8. ピシコシ(pís'kos', пiськoсь)「2ヴェルショーク(вершок)⁽⁹⁷⁾くらいの魚」は、トゥナイチャ(Tunajcha, Тунайча)湖の河口で、あまりにも大量に群れを成して泳いでいるので、アイヌは白い上衣やモシロアニ(mosirò-ani, мосирò-ани)「蒔」で獲れるほどである。

(89) この会話文は、ギリヤーク人が片言の不完全なロシア語で話すのを再現したものである。破格の文なので、何を言っているのかよくわからないところがある。

(90) 本辞典 p.334, 7525 番目の語として掲載されている。「(地名)クスナイ(Kusnaj, Куснай)の北方46露里にある小川、湖、アイヌの村」の意。

(91) 本辞典 p.122, 2691 番目の語として掲載されている。男性の名。

(92) 本辞典 p.421, 9485 番目の語として掲載されている。「(地名)クスナイの南方35露里にある岬」の意。

(93) 本辞典 p.283, 6342 番目の語として掲載されている。男性の名。

(94) 本辞典 p.327, 7355 番目の語として掲載されている。男性の名。

(95) 本辞典 p.238, 5337 番目の語として掲載されている。「弱い、無力な、病弱な、仕事ができない」の意。

(96) 本辞典 p.419, 9438 番目の語として掲載されている。「屈託のない、明朗な、力が強い、よく働く、巧みな」の意。

(97) ロシアの古い長さの単位、1ヴェルショーク=4.445 cm。

9. 冬, 遠くからも, 例えば, クスナイ (Kusunaj, Кусунай)⁽⁹⁸⁾ やシララカ (Siraraka, Сирарака)⁽⁹⁹⁾ からアイヌはやって来て, タコイ (Takoj, Такой)⁽¹⁰⁰⁾ の近郊で, クロテンを獲る。各々が 100 から 200 のカ (ka, ка) 「縄」を仕掛ける。10 本の縄はオピシペ (opis'pe, опи́сьпе), 100 本の縄はタンク (tánku, та́нку) という名がついている。
10. サハリンの魚の回遊。初めにニシン, 次にゴマポロ (gomaporo, гомáпоро)⁽¹⁰¹⁾ またはイツァノイ (itsyánoj, ицъя́ной)⁽¹⁰²⁾, 次にゲモイ (gemoj, ге́мòй)⁽¹⁰³⁾, そして最後にチュフ-チェブ (chuf-chèp, чуфъ-чѐпъ)⁽¹⁰⁴⁾ がやってくる。ニシンは 4 月の半ばにやってきて, 5 月の初めまで個々の「回遊で」現れる。カラフトマスは 6 月と 7 月に, サケは 8 月に獲れる。しかし, 場所によって魚の到来は様々である。すなわち, トブチ (Tobuchi, Тобучи) では, 11 月に大量のキュウリウオ (ウグイの一種) がやってくる (春は, そこで大量の小エビや「線形虫類」⁽¹⁰⁵⁾ の付着した春のキュウリウオが獲れる)。
11. トドのエニコロ-ポニ (én'koro-póni, э́нькоро-пони) 「眉間」を打撃すると, トドは死ぬ。
12. ポロ-マキリ (porò-makíri, порò-макири)⁽¹⁰⁶⁾ あるいはイナサク (ínásaku, инáсаку)⁽¹⁰⁷⁾ は炊事に使う。サ-マキリ (sá-makíri, са́-макíри)⁽¹⁰⁸⁾ は模様を彫るため, チェイキ-マキリ (cheiki-makíri, чеики-макíри)⁽¹⁰⁹⁾ は魚をおろしたり, 木を削ったり, 他のすべての木製品を作るために使う。サ-マキリは細かく刻んだり, 切断するのにも使われる。アイヌは絶えずそれを携帯している。
13. イクサ-アイヌ (íkusa-ajnu, икуса-айну) 「川の渡し守」は, 普通, 老人であり, 日本人に雇われている。
14. アイヌの鏡 (少数の者のところにある) は, 片面に煤が塗られ, 枠に入れられた単なるガラスである。アイヌ語ではインカラ-カニ (inkara-káni, инкара-ка́ни)⁽¹¹⁰⁾ と呼ばれる。

(98) (地名) サハリン島西岸, 北緯 47 度 58 分 17 秒近くにあるアイヌと日本人の混住の村。

(99) 本辞典 p.297, 6668 番目の語として掲載されている。マヌヤの南方 6 露里のところにある岬とアイヌと日本人の混住の村。

(100) 地名。

(101) 本辞典 p.60, 1239 番目の語として掲載されている。「短い鼻づらのカラフトマス」の意。

(102) 本辞典 p.103, 2258 番目の語として掲載されている。イチャノイ (ichanoj, ичаной) とも言う, ゴマポロ (gomáporo, гомáпоро) の同意語。

(103) 本辞典 p.55, 1104 番目の語として掲載されている。「カラフトマス, こん棒サケ」の意。

(104) 本辞典 p.429, 9683 番目の語として掲載されている。「サケ, シロザケ」の意。チュフ-チェブ (chukh-cheb, чуфъ-чѐбъ) とも言う。

(105) 原文では, волосатики 「線形虫類, フィラリア」と書かれている。

(106) 本辞典 p.260, 5843 番目の語として掲載されている。「アイヌの大きなナイフ」の意。

(107) 本辞典 p.85, 1831 番目の語として掲載されている。ポロ-マキリの同意語。

(108) 本辞典 p.281, 6292 番目の語として掲載されている。「アイヌの 2 番目のナイフ」の意。

(109) 本辞典 p.419, 9438 番目の語として掲載されている。「イナウをつくるためのナイフ, 削るためのナイフ」の意。

(110) 本辞典 p.88, 1877 番目の語として掲載されている。「のぞき眼鏡, 鏡, 眼鏡」の意。

15. アイヌは、魚が獲れない場合、イラントライキ (irantráiki, ирантра́йки)⁽¹¹¹⁾ という草をモリに塗る。チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) は、このことを聞いたことがなかった。
16. キテ (kite, китэ)⁽¹¹²⁾ は、次のような形をしている。 
17. シキイキニ (Sikijiki-ni) 「シラミの痒さのために背中を掻く棒」の一方の先には、模様の輪が作られている。
18. トコサ (tokósa, токо́са) 「トクサ属の植物」でアイヌは木製品を滑らかにする (磨く)。
19. イラクサの魚網をアイヌが使うのは、極めてまれである。私がいたときは、アイヌが自分で作った網で魚を獲るのを少なくとも一度も見たことがなかった。
20. 丸腰のアイヌに熊が襲いかかっても、アイヌは死んだふりをして、身動き一つしない。たとえ熊がアイヌに噛みつこうとしても、アイヌが身動き一つしないのが分かったと、熊はすぐに行ってしまうらしい。

10. アイヌの風習と慣習

1. ウントウリニ (Untrin', Унтринь) とアスイトゥエ・アイヌ (As'tue-ajnu, Асьтуэ-айну) の母親で、オトサン (Otosan, Отосан) 出身のクストゥラリ (Kúsutrari, Кусутрари) という名の年配の女性が、オトサン出身のチヴクスィー・アイヌ (Chivkus'-ajnu, Чивкусъ-айну) とともに、赤ん坊を連れて、オトサンからスマヤ (Sumajà, Сумайя) へ行くとこだった。ナイブチ (Najbuchi, Найбучи) の古い河口の付近で、彼女の乗った犬ぞりがクスナイ (Kusunaj, Кусунай) からタコイ (Takoj, Такой) へ戻る農民たちを追い越そうになった。犬ぞりが追い越そうとすると、農民たちは馬を駆り立てたので、犬ぞりは後ろに留まらねばならなかった。いよいよチヴクスィー・アイヌは絶対に追い越そうと決めたが、馬ぞりが方向を変える際に、一人の農民が馬を無理に行かせようとして、荷ぞりが犬ぞりのそりを押しつぶした。女性も荷ぞりの下敷きになった。女性の足と腹を荷ぞりが轢いたのだ。彼女はしばらくの間荷ぞりの下になって道を引きずられたので、背中の上は引き剥がされ、帯のリングはなくなっていた。近くを走行中だったアスイトゥエ・アイヌは、母親と怪我をしていない赤ん坊をスマヤまで連れて行った。数日後、母親のクストゥラリは亡くなった。ウントウリニはアシンペ (asimpe, асímпе)⁽¹¹³⁾ を要求して、

(111) 本辞典 p.93, 2010 番目の語として掲載されている。「黄色の花をつける草」の意。

(112) 本辞典 p.138, 3091 番目の語として掲載されている。「鉄製の細い棒と留め具のついた槍 (トゥナ (tunà, тунà) に継ぎ足される), トゥナに留め具で継ぎ足される継ぎ足し」の意。トゥナ (tunà, тунà) は、本辞典 p.349, 7832 番目の語として掲載されている。「セイウチやアザラシを獲るためのアイヌの長い槍」の意。

(113) 本辞典 p.25, 430 番目の語として掲載されている。「不当な仕打ち、侮辱に対する償い (殺人に対してもこの償いを遺族が受け取る)」の意。

クスナイで訴訟を始めた。そして、ウントウリニへは、チトフ (Titov, Титов) を介してスヴェルチコフ (Sverchkov, Сверхков) によって支払いがなされた (およそ 6 ないし 8 ルーブル, タバコと中国産綿布で支払われたようである)。

2. チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) の舅のアンチプニ (Anchipuni, Анчипуни) がタコイを犬ぞりで走っていた。彼の犬が農民の子犬に飛びかかりそうになったが、彼は犬ぞりを操る梶棒で犬ぞりを止めたので、子犬は怪我をせずに逃げた。この時、百姓家から二人の農民の子が走り出てきて、一人が老人の頭を血が出るほど殴った。老人は身を守ろうとしなかった。しかし、チヴォカンケはこの殴打に対してアシンペ (償い) の要求を通すことを強く望んだ。
3. その場にいない者のことを悪くいうと、噂されている者はくしゃみのとき鼻が痛む。良いことが言われていると、くしゃみをして鼻が痛まない。くしゃみをして鼻が痛む者は次のフレーズの一つを言う。

ヘマタ・セタ・コチャルヴェン (khémata setà kocháruven, хэмата сетà кочáрувень⁽¹¹⁴⁾) ; ヘマタ・セタ・ヴェムベサニ (khémata setà vempesáni, хэмата сетà вемпесáни) ; ヘマタ・セタ・エサムピ (khémata setà esámpi, хэмата сетà эсáмпи) ; ヘマタ・セタ・サニ-ピシ (khémata setà sáni-pisì, хэмата сетà сáни-писи) ? 「私を罵るのは (私の陰口をいうのは) どこの犬 (ろくでなし) なのか? 」

4. トフコムベ (Tokhkómbe, Тохкóмбе) は、ウスロ (Usurò, Усyrò) 出身のアイヌの男である。ロシア語を話し、ギリヤークの辮髪をしている。しかし、それでも、ギリヤーク人を犬 (ろくでなし) と呼ぶ。また、日本人と付き合いたがらない。
5. アイヌの遺産は次のように分配される。男は、次のものを得る。a) 刀, b) シントコ (sintoko, сiнтоко)⁽¹¹⁵⁾ と酒盃, c) 男物の衣服および d) 家。一方、女は、遺産として次のものを得る。a) ピーズ, b) 食事の椀, c) 女物の衣服, および d) 納屋。
6. ソヤ-ウンタラ (Sóya-úntara, Сóя-ýнтара)⁽¹¹⁶⁾ の女性たちは挨拶をするとき、手をこすり、手を顔の方へもっていき、右手で上唇を撫でる。ソヤ-ウンタラやサルンタラ (Saruntara, Сарунтара)⁽¹¹⁷⁾ は、驚くとオー！と叫び、自分の鼻の先をつかむ (エトウ-キシマ (etu-kís'ma, эту-кiсьма)⁽¹¹⁸⁾)。

(114) コチャル-ヴェン (kocharu-ven, кочару-вень) の表記で本辞典 p.149, 3319 番目の語として掲載されている。「罵る, 悪口を言う」の意。ヴェムベサニ (vempesáni, вемпесáни), エサムピ (esámpi, эсáмпи), サニピシ (sáni-pisì, сáни-писи) は全て同義語であると記載されている。

(115) 本辞典 p.296, 6639 番目の語として掲載されている。「シントク (sintoku, синтоку) ともいう。日本の小さな桶 (漆が塗られた), 蓋がついていて, 形が手提げの編み籠に似ている, 米などを入れる物」の意。

(116) 本辞典 p.309, 6932 番目の語として掲載されている。「マツマイの北部の住民 (アイヌ)」の意。

(117) 本辞典 p.285, 6374 番目の語として掲載されている。「マツマイ島の西部の住民 (アイヌ)」の意。

(118) 本辞典 p.467, 10510 番目の語として掲載されている。「驚く, 驚きのしるしとして, うなり声を上げる」の意。

7. 秋, シララカ (Siraraka, Сирарака) にあるキノコサイレ (Kin'kosajryè, Кинькосайрэ)⁽¹¹⁹⁾ のユルタの中で、彼の妻と娘婿がいる前で、ロンギンストゥロノフ (Longintronov, Лонгинстронов) (第2中隊の兵士) は、寒いところへ行くのを望んでいなかったクズネチハ (Kuznechikha, Кузнечиха) を使った。このことに関して話していたチヴォボカンケ (Chivokánke, Чивокáнке) とチヴカランケ (Chivukaránke, Чивукара́нке) は、ロシア人のそのような恥知らずの行動に憤慨し⁽¹²⁰⁾、ロンギンストゥロノフとクズネチハを犬 (ろくでなし) と呼ぶ。ロンギンストゥロノフは、私に対して従卒のように振舞って、この話が本当であることを認めた。
8. 他の人に呼びかけるとき、アイヌは次の言葉を使う。アイノ (Ajno, Айно) ! (大人の男性に), カマヤン (kamayan, камаянъ) ! (大人の女性に), カイノ (Kajno, Кайно) ! (男の子に), ミロコプ (mirokopu, мирокопу) (女の子に)。
9. サルンタラ (Sarúntara, Сарýнтарá) は、額にとっても細い筋を剃って入れているが、チュヴカ・ウンタラ (Chuvka-úntara, Чувка-ýнтарá)⁽¹²¹⁾ は、少し広い筋を入れている。サルンタラは、後頭部 (首筋) をしっかり剃っている。パゴ (Pago, Паро)⁽¹²²⁾ によると、後頭部をすべて剃っている。ソヤ・ウンタラの女性も少し後頭部を剃っている。チュヴカ・ウンタラは、男も女も同様に少し後頭部を剃っている。
10. ハコダデ (Khakodade, Хакодаде)⁽¹²³⁾ の近くに住むアイヌの若者は、ある種のモトゥントウラ (motúntura, мотýнтура)⁽¹²⁴⁾ をしている。つまり日本風の髪型をしている。女性は日本風に歯を染めていて、お金を受け取ってカヌンツイ (kanúntsi, канýнци) 「娼婦」として振舞っている。チヴォカンケが言うには、ハコダデ周辺の住民はサルンタラにもチュヴカ・ウンタラにも属していない。
11. アイヌが年の勘定する際、彼らがどんな数え方を使っているかを知る必要がある。彼らはパ (pa) 「年」でも、エニコ-パ (en'ko-pa, э́нько-па) 「半年」でも数える。「半年」で数える際、サフパ (sákhpa, сáхпа)⁽¹²⁵⁾ とマタパ (matápa, матáпа)⁽¹²⁶⁾ が別々の年とみなされている。
12. エトゥーキシマ (etù-kis'ma, этý-кíсьма)⁽¹²⁷⁾ と呼ばれる風習は、まれにサハリン・アイヌの

(119) 本辞典 p.135, 3002 番目の語として掲載されている。男性の名。

(120) 「恥知らずの行動」とあるが、なぜ「恥知らず」なのか、理由がよくわからない。翻訳に重大な誤りがあるかもしれない。

(121) 本辞典 p.427, 9629 番目の語として掲載されている。「マツマイ島の東部の住民 (アイヌ)」の意。

(122) 本辞典 p.243, 5449 番目の語として掲載されている。男性の名。

(123) 函館 (はこだて) のことであろう。

(124) 本辞典 p.176, 3965 番目の語として掲載されている。「(日本人の頭にある) 編んだ髪, お下げ」の意。

(125) 本辞典 p.285, 6397 番目の語として掲載されている。「夏期, 夏 (文字通りであれば, 夏の年)」の意。

(126) 本辞典 p.164, 3658 番目の語として掲載されている。「冬期, 冬 (文字通りであれば, 冬の年)」の意。

(127) 本辞典 p.467, 10510 番目の語として掲載されている。「驚く, 驚きのしるしとして, うなり声を上げる」の意。

ところでも見受けられる。彼らは、ふつう、驚くとオ！ーゴ！ーシタマレ！ (ol-Gol-Sitamarel, ol-Gol-Sitamapel)⁽¹²⁸⁾ あるいはシトマレーナ！ (Sitomare-nal, Ситомаре-нал)⁽¹²⁹⁾ と唸ったり、叫んだりするだけである。

13. チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) の言葉によると、ウランカラバレ (urankarabarè, уранкарабарè) は、顎ひげを一回なでることを伴う挨拶の交わり方である。ヤイ-イライケレ (yaj-irájkere, яй-ирайкере)⁽¹³⁰⁾ の際と同様に。ソイタ (sojta, сойта) 「家の外」では、しゃがんで行く。座ることができないからだ。

14. タコイ (Takoj, Такой) のサケ-コヌブ-ル-チャチャ (sakè-konúbu-ru-chácha, сакè-конúбу-ру-чáча)⁽¹³¹⁾ のカフク (Kakhku, Какху)⁽¹³²⁾ のユルタで、私は 18 歳ぐらいの「名前のない」アイヌの娘に出会った。カフクの説明によると、彼女には先祖から名前が伝わっていないのだ。カフクによると、これは唯一の例である。この娘は他のアイヌの女性から何本かの針と女物の着物カヤ (kayà, кая)⁽¹³³⁾ を盗んだ。そして、他のアイヌにはないタコイの習慣に従って、左手の人差し指と小指の一関節ずつを切り取られた。カフクによると、これはアイヌでは「イチャカシノ (ichákas'no, ичáкас'но)⁽¹³⁴⁾」と呼ばれている。“Tramu isyamchiki-is'ka; ichákas'no-pirika okaj, is'ka isyam, tramu an (Траму исямчики-ис'ка; ичакас'но-пирика окай, иська исямъ, траму анъ)⁽¹³⁵⁾”。兵隊たちはこの娘をアンノスケ (Annoske, Анноске)⁽¹³⁶⁾ と名付けた。そして、アイヌもそう彼女を呼び始めた。このことがあって一年後、新たに着物を盗んだためアイヌは彼女を鞭打った。

15. チヴォカンケによると、アイヌの女性は生涯に一度か二度しか刺青をしない。一度で唇に上手く刺青ができれば、一回で十分なのである。刺青を入れるのは、冬または春である。しかし、上唇の中央の刺青は、3 回ではないにしても、常に 2 回は行われる。「唇のまわり」に墨を入れるのは、成人した女性であるが、処女を失った女性も処女の娘もそうすることがある。

(128) シタマレは本辞典には掲載されていない。しかし、シトマレという語が本辞典 p.303, 6792 番目の語として掲載されている。「素晴らしい！ 凄い！（驚きの意味で）」の意。おそらく、シタマレとシトマレは同義語であろう。

(129) シトマレーナ (Sitomare-nal, Ситомаре-нал) の表現で、本辞典 p.303, 6793 番目の語として掲載されている。「素晴らしい！ とても見事だ」の意。

(130) 本辞典 p.467, 10510 番目の語として掲載されている。「感謝する、ありがとう」の意。

(131) サケ-コヌブ-ル (sakè-konúbu-ru, сакè-конúбу-ру) は、本辞典 p.282, 6322 番目の語として掲載されており、「酒を愛する、酒を愛する～」の意。チャチャ (chácha, чáча) は、本辞典 p.418, 9421 番目の語として掲載されており、「老人」の意。

(132) 本辞典 p.124, 2734 番目の語として掲載されている。男性の名。

(133) 本辞典 p.126, 2771 番目の語として掲載されている。「魚の皮製の女性の衣服」の意。

(134) 本辞典 p.104, 2266 番目の語として掲載されている。「教える、教訓を与える、助言する、(道を) 示す」という意。

(135) このアイヌ語の文はキリル文字で書かれている。著者の訳も注釈も書かれていない。

(136) 本辞典 p.15, 254 番目の語として掲載されている。「真夜中」の意。

16. アイヌの娘は、ヤイコタン (yàjkotan, яйкотанъ)⁽¹³⁷⁾「恥ずかしがる」のとき、髪の毛で顔を覆って、その隙間からときどき横目で見える。
17. ヘマタ・コタン・アレギ? (Khemata kotan aregi?, Хемата котанъ ареги?)「どの村から来たか?」〈新参者にかけられる質問〉。
ヘマタ・ヴェベケレ・アン? (Khemata vebekere an?, Хемата вебекере анъ?)「変わりはな
いか?」
ニシトム-ニシヤフ! (Nis'tomu-nisyakh!, Нисьтому-нисях!)「変わりない(すなわち、病人
も死者もない)!」
病人が多くいると、ヤイ-シトマ! (yaj-sitómal, яй-ситómal)あるいはチェヤイシトマ!
(cheyajsitómal, чейяситómal)「すなわち、「言うのが憚られる!」と答える。このような答え
がなされるのは、訪問者がやって来たその村で、実際よりも病人が少ないように思わせるため
である。
18. エイシスネ (Ejsisne, Эйсисне)⁽¹³⁸⁾によると、ポロペトゥンコタン (Poropetunkotan, Поропетункотан)⁽¹³⁹⁾のアイヌはけっして戦をしなかった。誠実なニシヤフマウカラ (Nisyakhmaúkara, Нисяхмаўкара)⁽¹⁴⁰⁾によると、戦をしたのは大昔だけだった。
19. エタセマ (Etásema, Этáсема)⁽¹⁴¹⁾は、コチヨベ (Kochóbe, Кочóбе)出身の12歳の少女である。彼女は、すでに結婚している(おそらく、婚約しただけで、まだ夫と暮らしていない
だろう)。
20. マトウ・アイヌ (Mat-ájnu, Матъ-áйну)⁽¹⁴²⁾は、チェピサニ (Cherisani, Чеписани)⁽¹⁴³⁾の
ントウカイ (Kontukaj, Контукай)⁽¹⁴⁴⁾であり、ゴラフプニ (Gorákhpuñi, Горáхпуни)⁽¹⁴⁵⁾の住
人である。彼は、日本人から左の袖に記章のついた士官の上衣であるチョ・フルテ (cho khurúte, чо хурúте)⁽¹⁴⁶⁾をもらった。

(137) ヤイコタン (yàjkotan, яйкотанъ) は本辞典には掲載されていないが、ヤイカタン (yàjkatan, яйкатанъ) は本辞典 p.476, 10695 番目の語として掲載されている。「恥ずかしがる、良心に恥じる」の意。

(138) 本辞典 p.456, 10277 番目の語として掲載されている。男性の名。

(139) 本辞典 p.262, 5876 番目の語として掲載されている。「(地名) ポロペフナイ川の傍にあったが、現在はないアイヌの村、カルサコフ哨所の東方 52 露里にある現在のムラヴィヨフ哨所のある場所にあった」の意。

(140) 本辞典 p.197, 4421 番目の語として掲載されている。男性の名。

(141) 本辞典 p.466, 10495 番目の語として掲載されている。女性の名。

(142) マタイヌ (Matajnu, Матайну) という語が本辞典 p.164, 3654 番目に掲載されている。男性の名。おそらく、マトウ・アイヌ (Mat-ájnu, Матъ-áйну) と同じ人物の名であろう。

(143) 本辞典 p.419, 4444 番目の語として掲載されている。「(地名) カルサコフ哨所の東方 29 露里にあるアイヌと日本人の混住の村」の意。

(144) 本辞典 p.143, 3214 番目の語として掲載されている。「(アイヌの) 長、日本語の単語」の意。

(145) 本辞典 p.61, 1263 番目の語として掲載されている。「(地名) カルサコフの東方 33 露里にあるアイヌの村」の意。

(146) 本辞典 p.426, 9617 番目の語として掲載されている。「幅広い袖のついた日本の上衣」の意。

21. サルンタラ (Sarúntara, Сарúнтара) は、非常に怒りっぽくて、短気で、熱烈にアシンペ (asimpe, асiмпе)⁽¹⁴⁷⁾ を好み、あらゆる些細なことや、自分にとって侮辱だと思われるあらゆる言葉に対して、アシンペ (asimpe, асiмпе) を要求する。
22. ムカラ-エントゥルム (Múkara-entrùm, Мýкара-энтрýмъ) 「斧の岬」。この岬でギリヤークは、先に山によじ登り、アイヌにめがけて石を投げつけ、彼らを撃破した。
23. チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) は、「タライカ (Tarajka, Тарайка) のアイヌ」と「ナイブチとマツマイのアイヌ」の間で、かつてナイブチで起こった戦に、オロフコ (Orokhkò, Орохкò)⁽¹⁴⁸⁾ も加わったということを聞いたことがなかった。
24. オコノ (Okóno, Око́но) は、幼い女の子の共通の呼び名である。固有でないこのような名前は、赤ん坊が歩き始めるころから名付けられる。このときまで赤ん坊は、名前をもっていない。子供は、固有でない(子供の)名前を10歳ぐらいまでもっている。10歳からは、本当の(ずっと変わらない)名前が付けられる。
25. サルンタラ (Sarúntara, Сарúнтара) の多くは、日本人の下で働かなくていいように、現在に至るまで海岸から遠く離れた森に住んでいる。チュヅカー-ウンタラ (Chúvka-úntara, Чýвка-ýнтара) は、最近やっと日本人の下で働き始めた。かつては、戦うことのみを好んでいた。
26. トンチ (Tònchi, Тòнчи)⁽¹⁴⁹⁾ あるいは Toj-i-Chi, Той-и-Чи) は、アイヌ民族が「少し背が伸び」始めた(かつて、アイヌは「小さかった」)頃、彼らに恐れをなした。石の斧や弓、壺の食器を残して、どこへとも知れず去ってしまった。
27. トイラフク (Tójrakhku, Тóйрахку) は、カシトゥル (Kasiturù, Каситурý) の長男である。彼は、ミトロファン⁽¹⁵⁰⁾ (金持ちのバカ息子) と呼ばれると、腹を立てる。
28. ケマ・ストウンケマ (Kema-sutúnkema, Кема-сутýнкема) はカシトゥルの長女である。彼女は、「いたずらをするために」たえずクスナイ (Kusunaj, Кусунай) の日本人のところへ行き、そこから米や魚をもってきた。日本人との間に二人の子供を産んで、その後ウスリ (Usuri, Усури) のアイヌのところへ嫁に行った。
29. トフコンベ (Tokhkòmbе, Тохкòмбе) は、ロシア人の間ではプロホル (Prokhor, Прохорý) と呼ばれていた。彼はギリヤーク人となって、ギリヤークの女性と結婚した。しかし、その女性性は私がいた頃、彼の元からギリヤークの男性のところへ逃げた。そのギリヤークの男女は、

(147) 本辞典 p.25, 430 番目の語として掲載されている。「不当な仕打ち、侮辱に対する償い(殺人に対してもこの償いを遺族が受け取る)」の意。

(148) 本辞典 p.231, 5147 番目の話として掲載されている。「シュエ (Syu, Сю) 川近くに住んでいる民族」の意。

(149) 本辞典 p.332, 7448 番目の語として掲載されている。「石器時代の品を残したサハリンの古代の居住者」の意。

(150) ミトロファン (Mitrofan, Митрофанъ) は、18 世紀のロシアの劇作家 D. I. フォンヴィージン Д. И. Фонвизина の《Недоросль (未成年)》の主人公の名に由来する。

長くドゥーイ (Duj, Дуй) のニコラエフ (Nikolayev, Николаев) 大尉のところで働いていたので、ロシア語をうまく話すようになった。

30. トウレゲ・コロ (Trége-koro, Треге-коро)⁽¹⁵¹⁾, つまり, トウレイ (Turyej, Турей)⁽¹⁵²⁾ のポロ・ジャンギン (Poro-dzhangin, Поро-джангинъ) は, 二人の妻と結婚をした。
31. ウムライパ (Umurápa, Умура́йпа)⁽¹⁵³⁾ というのは, 以下のようにすることである。挨拶を交わす2人が四本の手をすべてを交互に積み上げ (一方の手と相手の手, その後, もう一方の手と, 最後に, 相手の手), さらに両者の親指の先が互いに触れ合うようにする。そして, このように手を積み上げてから, 軽く揺さぶる。
32. チヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) によれば, ウランカラバレ (uránkarabare, уránкарабаре)⁽¹⁵⁴⁾ はイナヌカラフテ (inánukarakhte, инáнукарахтэ)⁽¹⁵⁵⁾ と同義語である。ウランカラバレの際, アイヌは向かい合ってしゃがみ, 2度手をこすり, それを顔にもっていつて, それで終る。アイヌは立ち上がって, お互いに相手の煙管に自分のタバコを詰める。しゃがんだ状態でのウランカラバレは腰を掛ける場所がないところで行われる。なぜなら, アイヌは, 立ったままでの挨拶を無作法だと考えるからである。しかし, 異民族と絶えず出会うことにより, アイヌは古い習慣を破った。そして, 挨拶の別の方法としてイナヌカラフテを区別するようになったのである。それは, 立ったままで一回手をこすり, 一回手で頬ひげをなでる。イナヌカラフテは異民族と会ったときにだけ行われる。
33. チヴォカンケの話。日本人は放火犯の足を二頭の馬に縛りつけ, 放火犯の足元に燃え盛る火を置く。馬たちは火に驚いて, 放火犯を引き裂く。
34. チヴォカンケは, ウムライパ (umurápa, умура́йпа)⁽¹⁵⁶⁾ が親類との間だけで用いられているということを否定する。
35. チャイトンコロ・マイミネ (chajtónkoro májmine, чайтónкоро ма́ймине) は, まだ結婚の準備のできていない (月経のない) 娘である。チャイオイカリ・マイミネ (chajójkari májmine, чайóйкари ма́ймине) は, 結婚の準備ができた (月のものがある) 娘である。
36. イカオネカ (ikaóneka, икаóнека) またはウサセオネカ (usaseóneka, усасеóнека)⁽¹⁵⁷⁾ は, 臨

(151) 本辞典 p.339, 7615 番目の語として掲載されている。男性の名。

(152) 本辞典 p.351, 7875 番目の語として掲載されている。「(地名) マヌヤの南方 72 露里にあるアイヌと日本人の混住の村」の意。

(153) 本辞典 p.369, 8258 番目の語として掲載されている。「アイヌ流に手であいさつする」の意。

(154) 本辞典 p.374, 8374 番目の語として掲載されている。「アイヌの (重要な) 挨拶の方法」の意。

(155) 本辞典 p.85, 1828 番目の語として掲載されている。イナヌカラフテ (inánukarakhte, инáнукарахтэ) とも言う。「手をこすりながら, また, 手で顎ひげを触りながら, 挨拶する」の意。

(156) 本辞典 p.369, 8258 番目の語として掲載されている。「アイヌ流に手であいさつする」の意。

(157) ウサセオネカ (usaseóneka, усасеóнека) は本辞典に掲載されていない。しかし, ウカセオネカ (uka-seóneka, укасеóнека) が, 本辞典 p.364, 8152 番目の語として掲載されている。「イカオネカ (ikaóneka, икаóнека) を参照」と書かれている。

終の人を見ることである。アイヌはこのために遠くから寄り集まる（普通は、親類や知り合いだけ）。

37. イコネ (ikóne, ико́не) 「病人（複数）」は、頭頂部を剃らず、髪も刈らない。病人とは他の者が挨拶する事さえしない。
38. イコムイ (ikómuĭ, ико́муĭ) は、シラミを探すこと。アイヌの女性はシラミを摘み出して、噛み潰す。この時、つばとっしょに吐き出さない。ノミは火に投げ入れられる。
39. モナシ (monási, мона́си) は、返済の滞った債務者から搾り取ること、たとえば、クロテンや犬などを取り上げることである。債務者は、しきたりに従って、このことに対して腹を立ててはいけない。
40. アイヌは、通りがかりの旅人が自分のところに泊まるのを望まないとき、旅人にオヤフターカネ！ (oyákhta-kaneĭ, о́яхта-кани́) あるいはオヤチシェ・オマン！ (oya-tishe omanĭ, о́я-тише ома́нĭ) と言う。つまり、「どうぞ、他の所へ！」または「他の家へ！」の意。
41. チヴォカンケ (Chivokánke, Чивокáнке) によると、サハリンのアイヌは決してゴニ・ペレ (goni perè, гони пе́рэ) 「腹を切る」をすることはない。
42. アイヌの女性は10歳から唇を染め始める。

11. 四季と十二月

トゥリコマ (Trikoma, Трикома)⁽¹⁵⁸⁾ (または、トンビ (Tómbi, Тóмби)⁽¹⁵⁹⁾,
あるいは、チュフ (Chuf, Чуфь)⁽¹⁶⁰⁾。

1. トウル-チュフ (Trú-chuf, тру́-чуфь)⁽¹⁶¹⁾ 「1月」。サハリンでは冬の道ができあがる。
2. セレマ (Sérema, Сэрема) 「2月」。ヂヤチコフ (D'yachkov, Дьячков) によると、タライカ (Tarajka, Тарайка) のアイヌの所では、オンネヴ-チュフ (Onnev-chukh, Онневъ-чухъ)⁽¹⁶²⁾。

(158) 本辞典 p.341, 7656 番目の語として掲載されている。「月（30日）」の意。同義語としてチュフ (Chuf, Чуфь) がある。

(159) 本辞典 p.330, 7412 番目の語として掲載されている。「月（30日）」の意。

(160) 本辞典 p.429, 9673 番目の語として掲載されている。「天体, 太陽, 月」の意。

(161) トウル (tru, тру) は、「道」の意 (本辞典 p.342, 7677 番目の語)。

(162) オンネヴ (Onnev, Онневъ) は「鷺」の意。チュフ (Chukh, Чухъ) はチュフ (Chuf, Чуфь) の同意語。

3. ガフトラ (Gákhtra, Гáхтра) 「3月」。ハフ (khakh, хахъ)⁽¹⁶³⁾ が育ち始める。ヂヤチコフによると、タライカのアイヌのところでは、エトウオン-チュフ (Etúon-chukh, Этúонъ-чухъ)⁽¹⁶⁴⁾。
4. キウタ (Kiuta, Кiута) 「4月」。オソカ (osoka, осока)⁽¹⁶⁵⁾ (および草全般) が生え始める。
5. アラコイノカ (Arakójnoка, Аракóйнока) 「5月」。春のキュウリウオ (ウグイの一種) が獲れる。
6. シチャベシボ (Sichápes'po, Сичáпесъпо) 「6月」 < シチャベシベ (Sichápes'pe, Сичáпесъпе) は、「森のネズミ」の意>。この呼び名は存在するのだろうか? 南サハリンのアイヌのところでは、イグムパ・チュフ (Igúmpa chuf, Игúмпа чуфъ)⁽¹⁶⁶⁾ が6月であるが、北サハリンのアイヌのところでは、7月である (その通りなのか?)。
7. サフチェフカラベ (Sakhchekhkarapè, Сахчехкарапè) 「7月」。干し魚を作る。
8. イマー-チュフ (Imá-chuf, Имá-чуфъ) 「8月」。冬用にあぶった魚を作る。
9. イハレー-チュフ (Ikháre-chuf, Ихáре-чуфъ) 「9月」。木の葉が落ち始める。マウター-チュフ (Máuta-chuf, Máута-чуфъ)。ヨーロッパノイバラの実が干される。オタルフ-カラッペ (Otáruf-karappè, Ота́руфъ-караппè)⁽¹⁶⁷⁾, マウイエチイ・チュフ (Maуyéchij chuf, Мау́е́чий чуфъ) (後者の名称は、二つとも同じ意味をもつ)。
10. ウレボキタンベ (Urebokitambe, Уребокитамбе), あるいは, ウレボキタンペ (Urebokitampe, Уребокитампе) 「10月」。
11. スランチュフ (Suránochuf, Сура́нчуфъ) 「11月」。ひゅうひゅう音がする (荒れている)。
12. ナンチュフ (Nánchuf, На́нчуфъ) 「12月」。

12. 名辞変化と動詞変化, 語の置き換え, 小詞とその用法⁽¹⁶⁸⁾

1. クスナイ (Kusunaj, Кусунай) の隊員を告解させるためにやってきて、去って行ったシメオン (Simeon, Симеон) 神父に対するチヴォカンケ (Chivokanke, Чивоканке) の言葉。

(163) 本辞典 p.397, 8887 番目の語として掲載されている。「ユリ, クロユリ (独特な形), 何らかの植物の球根 (食べることができる)」の意。

(164) エトウオン (Etúon, Этúонъ) は「黒いカラス」の意 (本辞典 p.468, 10525 番目の語として掲載されている)。

(165) どのような植物か不明。

(166) イグムパ (igúmpa, игúмпа) は、「(魚, タバコ) を細かく刻む」の意。イフムパ (ikhúmpa, ихúмпа) とも言う。

(167) オタルフ (Otáruf, Ота́руфъ) は、「ヨーロッパノイバラの実」の意 (本辞典 p.234, 5248 番目の語として掲載されている)。

(168) この章は、表題と内容が全く一致していない。

Tan kotàn okhtà utása-an kusù áregi an. Okhgórono okáj an tren'kájne, táne tan kotàn ta ekh. Tan kotàn ta ekh tren'kájne, an è núkara. Trékoro itu-yas'kara, trékoro anekoyaj irájkí. Tamà in'konte. Trékoro yaj irájkire an. Támbe kusù pírika na ománchiki-pírika. Igókhpa omàn kusù-karà. (Танъ котанъ охтá утáса-анъ кусú áреги анъ. Охгóроно окáй анъ тренъкáйнэ, táне танъ котанъ та эх. Танъ котанъ та эх тренъкáйнэ, ан è нýкара. Трékоро иту-яськара, трékоро анекойáй ирáйки. Тамá инъкóнтэ. Трékоро яй ирáйкире анъ. Тáмбе кусú пíрика на омáнчики-пíрика. Игóхпа омáнь кусú-карá.)

「私はこの村に客としてやってきた。私は長くつつがなく逗留した。今、君がここにやってきた。君は無事に到着した。私は君に会った。われわれはとても親しくなり、君にとっても感謝している。君は私にビーズをくれた。非常にありがたく思う。そのため、君に『道中ご無事で』と言う。心から。私自身も君の後に発つ」。

2. ウトゥパーアイヌ (utúpa-ajnu, утýпа-айну)⁽¹⁶⁹⁾ 「仲たがいでいる人」と和解を望んでいる人の思い。

— Anokaj an tren'kajne, ikojki ámpe ka khánne. Nakan kusu ponno-niyakhka urankara kara e i ki karachiki, orovano ykoramu pirika an ki nangò. Irutas'pano ukotiseru ukokhte (あるいは ukocharu ukókhte, あるいは ukotisheru-ukókhte) an ki nango. Nakhtekh orova ukoramuvén, khaman ki nango nan-korope-ne, pono-pono-niyakhka urankara kara e i ki karachiki ukoramuvén pirika an ki. Nakhtekh orova uko-prus'ka, an uko khemakare, an ki nango. Ke! (Анокай анъ тренъкайнэ, икойки áмпе ка хáннэ. Наканъ кусу понно-нияхка уранкара кара э и ки карачики, оровано укораму пирика анъ ки нангò. Ирутасъпано укотисеру укохтэ (あるいは укочару укóхтэ, あるいは укотишеру-укóхтэ) анъ ки нанго. Нахтэх орова укорамувенъ, хаманъ ки нанго, панъ-коропе-нэ, поно-поно-нияхка уранкара кара э и ки карачики укораму пирика анъ ки. Нахтэх орова уко-прусъка, анъ уко хемакаре, анъ ки нанго. Ke!)⁽¹⁷⁰⁾

少し腹を立てているが、和解を望んでもいる者の返答。

— Sonnoka a yajkuramuos'ma. Ene es' ka e ki kusu ne yaj, tambe sonno yajko akhgunke, an ki kusu. Maskin' khan ner-anitakh, khamanki kun' gi kusu. Khameum pono-niyakhka urankara kara an ekarakara, nakan kusu tane orovano ukoramuvén, khaman ki kunino, egori-tak gi, ukoramuvén khajta, khaman ki nan-korope ne. Sne utakhta ne kusu, porono khamejyeyakhka pirika nan-korope ne. Kvani opovano pono-pono ku ki katu vempe. Niyakh kajki khavrakh kanne ka uranko-pontene khame-kiyakhka pirika nan-korope-ne. Nakhtekh orovano irutas'pano ukoramuvén pirika an kichiki pirika nan-korope-ne. Nakhtekh khemaka. (Соннока а яйкурамуосьма. Энэ эсь

(169) 本辞典 p.381, 8526 番目の語として掲載されている。「口論の後お互いを憎しみあっている人たち、最終的に仲たがいでいた人たち(互いのところへ行かないし、出会っても目を向けることさえしない)」の意。

(170) この一節のロシア語訳は書かれていない。

ка э ки кусу нэ яй, тамбе сонно яйко ахгунке, анъ ки кусу. Маскинъ ханъ неръ-анъ итах, хаманки кунъ ги кусу. Хамеумъ поно-ніяхка уранкара кара анъ экаракара, наканъ кусу тане оровано укорамувенъ, хаманъ ки кунино, экори-так ги, укораму хайта, хаманъ ки нанъ-коропе нэ. Сне утахта нэ кусу, пороно хамейеяхка пирика нанъ-коропе нэ. Квани оровано поно-поно ку ки кату вемпе. Ніяхъ кайки хаврах канне ка уранко-понтане хаме-кїяхка пирика нанъ-коропе-нэ. Нахтэхъ оровано ирутасьпано укораму пирика анъ кичики пирика нанъ-коропе-нэ. Нахтэх хемака.)

チヴォカンケは、この会話の中で次のことに気づいている。“an-uko-khemakare-chiki, pirika nango (анъ-уко-хемакаре-чики, пирика нанго)”すなわち、「和解できれば、おそらく、まあよろう」つまり、片方が「いやな思いをしなければならない」。

「われわれはお互いに争わないことに同意した。このため、もう少し歩み寄ると、たぶん相互の合意が訪れ、おそらく、お互いにその方向へ進み続けるであろう。今後は、もちろん対立はなくなり、もう少しお互いに譲歩すると、互いの平和が訪れるだろう。相互の憎しみは消えるだろう。私は行く⁽¹⁷¹⁾！」⁽¹⁷²⁾

13. 目次

1. アイヌとその言語の研究のための資料 ⁽¹⁷³⁾	1
2. アイヌについての抜粋	31
3. アイヌの数	101
4. アイヌについてのさまざまな情報；a) 宗教（詩歌）	105
b) 医療	121

(171) 原文では、動詞идти「(歩いて、一定方向へ) 行く・来る」の1人称単数現在形が書かれているが、ここでの意味は不明。

(172) 編者注：腹を立てている者の返答は、本辞典の著者によって訳されていない。また、著者の死去により、辞典の補遺に掲載されている諸論文は、最初の論文を除いて、書き終えることができなかった。さらに、次ページに書かれている「目次」から分かるように、著者は「アイヌとその言語の研究のための資料 (Матеріали для изученія Айновъ и ихъ языка)」と題した115枚の原稿を書くつもりだったが、その幾つかを書き始めることさえできなかった。本辞典の補遺1として編者が掲載した「プフィツマイエルの著作の研究 (разборъ сочиненія Пфизмайера)」は、「アイヌとその言語の研究のための資料」には入っていなかった別の論文である。「アイヌとその言語の研究のための資料」の中にあるすべての論文と論文の間には大量の書かれていない原稿用紙がある。これは、夭折した学究が書こうとしたが書けなかった「アイヌとアイヌ語研究の資料」に掲載されるべきことを執筆するための原稿用紙であった。

(173) 原文では、Источники къ изученію Айновъ и ихъ языкаと書かれている。注(172)でМатеріали для изученія Айновъ и ихъ языкаと書かれているのと同じのものであろう。

c) アイヌの暮らし	
1. 食べ物	131
2. 衣服	141
3. 住まい	151
4. 生業	161
5. 風習と慣習	171
5. アイヌ語 ; a) 字母 音の省略, 変化, 繰り返し	181
b) 文法 1) 品詞の語尾	191
2) 名辞変化と動詞変化, 語の置き換え, 小詞とその用法	201
c) ことばとフレーズ ; 1) 身体各部の名称	211
2) 風と周期的な兆候	214
3) 一日の各部分	216
4) 月の位相	218
5) 四季と十二月	220
6) 数詞	222
7) その他 (正確には分類されていないもの)	
α) 哺乳動物	226
β) 魚	228
γ) 貝	229
δ) 植物	230

発行者より一言

私によって刊行されたアイヌ語・ロシア語辞典とその補遺全てを注意深く読んでいただいた皆様には、この辞典が著者によって十分に仕上げられていないことがはっきり分かるであろう。というのは、この辞典本編にない語やフレーズを引用したり、参照指示したりするところが本辞典に見受けられるからだ。もちろん、こういったことは、アイヌ語の研究には損失である。しかし、幸いなことに、それらの引用がこの辞典によって正しいと認められない例はきわめて少ない（しかし、存在はしている）。そのような引用は全て、アイヌと交流しその言語を勉強しなければならない人たちのために、この辞典の中に残した。それに加え、私は、疑問や誤解を引き起こす可能性のある、おそらくは、幾つかの、些細なことに、読者の注意を喚起しなければならない。

本辞典では、おおよそ半分の語にアクセントが付いていない。なぜなら、本辞典の筆者は、自身によって記録された単語（5733語、p.28 参照⁽¹⁷³⁾）とクラシェニンニコフ（Krasheninnikov, Крашенинников）（269語、p.19-20 参照⁽¹⁷⁴⁾）から借用された単語だけにアクセントを付けたからである。他の原資料から借用した語に筆者自身がアクセントを付けることができたか否か、私は判断しかねる。しかし、私はアイヌ語を知らないので、もちろん、アクセントを付けることはできなかった。辞典（の見出し語）にはアクセントが付いているが、フレーズの中では付けられていない語にアクセントを付ける決心さえつかなかった。なぜなら、読者が気づくことができるように、本辞典の中のいくつかの語結合では、語のアクセントが変わっている。さらに、本辞典では、正書法がかなりまちまちである。これは、著者の、いわば、軍人的な几帳面さのためであった。彼は語を他の原資料から借用するとき、その原資料（とくにダヴィドフ（Davydov, Давыдов））の正書法に厳格に従った。もっと新しい正書法や、著者のやや特有の正書法を使用したのは、著者自身によって記録された語の意味を説明するときだけだった。

私は、発行者として、原稿からの逸脱を自らに容認したのは、文法上さまざまな範疇に属している語を「；」の記号を使って区別した（たとえば、名詞を形容詞や動詞などと区別するように）という点でだけだった。

しかし、これらすべての欠点にもかかわらず、本辞典は、以前に出版されたアイヌ語辞典に比べて疑いようなない長所をもっている。

- 1) 語数の点で（以前に出版された辞典では3000語を超えていない）。
- 2) アクセントの点で。
- 3) 同義語や反対語⁽¹⁷⁵⁾を指摘している点で。

(173) 拙訳では、「アイヌ語・ロシア語辞典（2）」『学園論集』（北海学園大学）第85号、1995年、63頁

(174) 拙訳では、「アイヌ語・ロシア語辞典（2）」『学園論集』（北海学園大学）第85号、1995年、52頁

(175) 原文では、антитезы「対立、反対、対照法」と書かれている。

4) アイヌ語文法を作成する際の基礎となりうる多くの説明がある点で。

最後に、ガレージン (Garezin, Гарезин) 少尉のマンゾー語辞典 (本書 p.17⁽¹⁷⁶⁾) の出版に関して、約束を果たせなかったことを読者にお許し頂かねばならない。その辞典を注意深く読んでみると、以下のことが判明した。語数が非常に少ない (600 語以下) ということ (フレーズはそれよりも多いのだが)、さらに、きちんと整理されていないということ。だから、私はこれをロシア地理学協会シベリア支部に渡す方がはるかに良いと考えた。そこでは、会員の学者諸氏がその辞典から何がしかの利益を得ることができるからである。

教授 I. ドブロトゥヴォールスキー

(176) 拙訳では、「アイヌ語・ロシア語辞典 (1)」『学園論集』(北海学園大学) 第 84 号, 1995 年, 87 頁